

(一財)語学教育研究所 2025 年度講習会 講師プロフィール (五十音順)

相田 眞喜子 (あいだ まきこ) ⑰W5 担当

小学校で、子どもたちが試行錯誤しつつ言語を獲得していくたくましい姿に感動をもらいながら、日々、汗をかきかき授業をしています。教員を目指す大学生に指導法の実践的な講義をする機会もいただき、刺激をもらっています。語研で共に研究し切磋琢磨し合う仲間がいることはとても心強いことです。子どもたちの学び方に寄り添って、中学以降の外国語学習の下支えとなる力をつける授業づくりを、皆さんともご一緒に考える機会を頂けたら幸いです。

浅野 伸子 (あさの のぶこ) ⑳W11 担当

今までにいろいろな学力層の都立高校を経験してきました。その間一貫して心掛けたのは、英語を理解したい、使いたいという生徒の希望を尊重することです。流行りに振り回されることなく基本に忠実に授業を作る姿勢を学んだ語研で、明日の授業に悩む先生方の力になれることをうれしく思っています。

石川 ひろみ (いしかわ ひろみ) ㉑A14 担当

大学卒業後から埼玉県公立中学校に勤務しています。しかし、8年目を終えたところで一度退職。3年間、一般企業に勤務したのち、再び教職にもどりました。その後10年間、1年ごとに埼玉県内の様々な公立中学校に勤務しました。この間に TESOL 修士号を取得。語研では26研究グループで勉強させていただいています。残り少ない教員生活となりましたが、何ができるようになっているのか、まだまだ自分ではわからず、他にも様々な場で研修の機会を重ねています。

石田 裕子 (いしだ ひろこ) ㉒W6 担当

公立小学校で3,4,5年生の指導を担当しています。児童英語教育について学び始めた当初、なんと幸運なことに(!)第10研究グループの大先輩の先生方に手ほどきを受けることができました。現在、第10研究グループの先生方と一緒に学び、研究させていただく一方、授業の中で子どもたちの様々な反応や学ぶ姿にはっとさせられ、指導者としての新たな課題に気づかされる日々です。皆様とも、子どもの学びに寄り添った指導をご一緒に考えることができたら幸いです。

伊藤 雄二 (いとう ゆうじ) ㉓P2, ㉔W8 担当

約45年に亘って小中高大で英語を教えています。公立中学校、ミラノ日本人学校(小中)、東京学芸大学附属竹早中学校、東京学芸大学附属高等学校、東京芸術大学附属高等学校、北陸学院大学を経て、現在は大東文化大学で教科教育法(英語)の授業を中心に担当しています。2000年度パーマー賞受賞。現在パーマー賞委員。

江原 一浩 (えはら かずひろ) ㉕A10 担当

これまで5つの高校と5つの大学で、海外からの学生を含む多種多様な学習者たちを指導してきました。学習者と指導者の複眼的視点を持ち、英語学習と格闘しつつ、試行錯誤を繰り返し、授業改善に取り組んでいます。若林俊輔先生の言葉「教わったように教えるな」と、ファンズロー博士の主張“small changes”を羅針盤として、学習者の知識やスキルの化学変化を促進する触媒と成るべく努力を継続しています。現在、高崎経済大学と群馬大学の非常勤講師、及び、文部科学省検定済高校教科書 English Communication「Power On」の編集委員を務めています。今年度から長野県を中心とした、英語による観光ツアーガイドやスキー指導を始めようかと密かに思っています。

及川 賢 (おいかわ けん) ㉖A3 担当

語研評議員。東京外国語大学卒、東京学芸大学大学院修了、Reading 大学大学院修了。武蔵高等学校中学校教諭、東京学芸大学助手、山梨医科大学助教授を経て、2002年より埼玉大学。専門は英語教育学。教科教育法やゼミを通して、小学校教諭、中学校及び高等学校等の英語教諭の育成に力を注いでいる。検定教科書 TOTAL English Course 編集委員、『英語教育』(大修館書店)での新刊紹介(2002年10月号より)、学習指導要領実施状況調査分析委員(文部科学省)、2021年小学校英語教育学会全国大会実行委員長、2024年全国英語教育研究団体連合会(全英連)埼玉大会公開授業(小学校)指導者。埼玉県を中心に指導者や講師多数。

粕谷 恭子 (かすや きょうこ) ③A2 担当

ひよんなことから小学校英語の世界に飛び込み、現在に至ります。今も大学で教員養成に携わる傍ら、週に一日、私立小学校で英語の非常勤講師として勤めています。子どもが学びやすい授業と大人が思い込んでいる授業の乖離には驚くばかりで、子どもが大事にされ、言葉が大事にされる授業を目指しつつ、先生方が考えるきっかけとなれる研修が行えるよう、精進する毎日です。

川副 理美 (かわそえ さとみ) ⑰W5 担当

大学院生の時に海崎百合子先生と出会い、小学校で英語を担当する機会に恵まれました。海崎先生のお授業を見学・録音させていただき少しでも真似してみようとするところから始めて、そこから日々、目の前の子どもたちや同僚や第10研究グループの先生方からたくさんのことを教えていただいています。聞こえた音をそのまま発音する姿から小学生ならではの学び方があることを知り、子どもたちが持っているすばらしい力に頼りながら私自身も試行錯誤しています。

河野 周 (かわの あまね) ⑱A9 担当

上智大学大学院(心理学専攻・修士号)にてクリティカル・シンキングなどを研究。その後、浅野中学・高等学校に勤務した後、シドニー大学大学院(TESOL 専攻・修士号)に留学し、英語教育におけるディベートの効果的な活用について研究。同大学のディベート部(大学世界大会最多優勝チーム)にも所属。現在は、英語科教諭として聖光学院中学・高等学校に勤務し、同校の英語ディベート同好会を全国大会優勝に導く(高校全国大会8回・中学全国大会4回)。さらに、教員研修や中高生向けワークショップの講師として全国を回ると同時に、高校生英語ディベート世界大会の日本代表ヘッドコーチとしても活動中。著書:「中学・高校英語ディベート入門」(三省堂)「思考力・表現力を鍛えるための Logical English Reading」(三省堂)

北出 義伸 (きたで よしのぶ) ⑨A5 担当

立正大学付属立正中学校高等学校教諭。語学教育研究所第22研究グループ(談話文法研究)に所属しています。研究グループでは「英語を味わう」「日本語を味わう」ように聞く、読む、話す、書く大切さを学んでいます。日本語と英語の言語や文化の差異や、日本語と英語の談話における文法、語法、表現、対話の違いなどのことばへの気づきを高めながら授業に取り組める工夫を心がけています。

草間 浩一 (くさま こういち) ⑳A18 担当

武蔵高等学校中学校の教諭として40年弱英語教育に携わっています。途中、英国ニューカッスル大学に留学、生徒の学習スタイルに応じたCALL(Computer Assisted Language Learning)をテーマに研究し、PhDを取得しました。その後も個々の生徒の違いに応じた支援をテーマに学びながら、特別支援教育士としての知見も生かせるように、実践につなげています。2018年度からは早稲田大学の非常勤講師として私学における特別支援教育の集中講座も担当しています。

久埜 百合 (くの ゆり) ①A1 担当

1954年に青木常男先生の講義でPalmerに出会い、翌年教育実習で福井保・澤正雄両先生からご指導を受けた幸運を今更ながら感謝しています。成城学園初等学校(創立者・澤柳政太郎先生)では野上三枝子先生の下で23年間小学校英語教育について学び、その間大学や専門学校で「講読」と共に「早期英語教育」を担当していました。所属していた学会のご縁で、NHK教育番組『のっぽさんの英語大すきシリーズ』に続き、『えいごリアン 2000~2001』制作に関わりました。English in Action(ぼーぐなん; 1985)は2015年にデジタル化し、一部の公・私立小で使用されています。折々、Charlotte's Web(E. B. White)などで音読の練習を続けています。

久保野 雅史 (くぼの まさし) ⑮A7 担当

1960年、横浜市生まれ。神奈川県立外語短期大学付属高等学校に4年、筑波大学附属駒場中・高等学校に21年勤務し2008年度より現職。専門は、学習英文法、英語教育史(特に戦後日本)。英語授業研究会会長、日本英語教育史学会副会長、英語教育協議会(ELEC)評議員。高校時代の仲間たちとロックバンドを組み、横浜のライブハウスなどでキーボードを演奏。共編著:『Q&A 高校英語指導法事典』、『英語授業ハンドブック(高校編)』。共著:『決定版! 授業で使える英語の歌20』、『英会話・ぜったい音読(入門編)』。分担執筆:『教科書だけで大学入試は突破できる』、『すぐれた英語授業実践』、『学習英文法を見直したい』、『英語で教える英文法』など。

小菅 敦子（こすげ あつこ）⑫W3 担当

元東京学芸大学附属世田谷中学校教諭。この間に多数回にわたり授業を公開。NHK ラジオ『新基礎英語1』（1994～1995 年度）講師を勤める。中学校を退職後、武蔵野大学他にて教職の授業、英語指導に従事。1997 年「パーマー賞」受賞。語学教育研究所理事。パーマー賞選考委員長。第5 研究グループ（授業研究）顧問。

小菅 和也（こすげ かずや）②P1, ⑩W2 担当

千葉県立高校、東京都立高校、国立大学附属高校など、20 年余り高校の現場を経験してきました。その後、大学に籍を置いて中高英語教員養成に携わり、2021 年3 月に武蔵野大学教育学部を退職しました。自治体の現職教員研修にも数多く関わってきました。語研には20 代後半から、もう40 年以上お世話になっています。教師としての自分は、語研に育ててもらったと思っています。

静 哲人（しずか てつひと）⑦A4 担当

15 年間、中・高・高専で教えた後、大学に移って28 年目。大東文化大学で英語教員養成にあたっています。主に音声技能の向上のさせ方に関心があり、一斉授業内の個別指導方法としての「グルグルメソッド」、実際に英語の歌を歌わせることでの発音練習のふたつを提唱しています。主著は『英語授業の心・技・体』（研究社）、『日本語ネイティブが苦手な英語の音とリズムの作り方がいちばんよくわかる発音の教科書』『（同）単語の教科書』『（同）音読の教科書』（テイエス企画）。3 年前からランを始め、現在フルマラソン3 時間30 分切りが目標。

鈴木 文也（すずき ぶんや）⑳A15 担当

東京外国語大学外国語学部欧米第一課程英語専攻卒業。ランカスター大学言語学・英語学研究科修士課程修了、同大学博士課程在籍中。ケンブリッジ英語教授法資格 CELTA 取得。語学教育研究所研究員、同学生研修室長。専門は言語社会化、社会文化理論における学習者の主体性、教職アイデンティティ等。語学教育研究所、AAAL、AILA、BAAL、JALT、TESOL International Association、などで研究内容を発表。17 年間、私立の中学・高等学校で教えた後、大学に移って3 年目。高崎健康福祉大学人間発達学部講師、筑波大学附属駒場中・高等学校非常勤講師、東京外国語大学非常勤講師。

栖原 昂（すはら たかし）⑳P5, ⑳W13 担当

東京都の公立中学校で5 年間勤務したのち、現在の勤務校に移って10 年目になります。教師と仲間がいるからこそできる学びを大切にしたい授業を心がけてきました。教科書を軸にしなが、生徒が実生活や世の中で起きていることに「英語」という窓を通して考え、思いを馳せられればと日々思っています。今年度は中学1 年生を担当しています。小学校英語からのスムーズな接続を実現できる初期指導のあり方と、自分の意見を英語でしっかりとと言えるための適切なステップについて再研究中です。

佐々木 啓成（ささき よしなり）⑳A16 担当

京都外国語大学大学院外国語学研究科博士前期課程修了。2022 年、『英語教育』（大修館書店）4 月号～9 月号にて「リテリングの極意」連載執筆。2022 年、『リテリングを活用した英語指導～理解した内容を自分の言葉で発信する～』に対して、一般財団法人語学教育研究所から「外国語教育研究賞」（通称：伊藤健三賞）が贈賞された。他の著書には *A New Approach to English Pedagogical Grammar: The Order of Meanings*（共著：Routledge, UK, 2018 年）、『「意味順」で中学英語をやり直す本』（共著：KADOKAWA/中経出版, 2012 年, 2023 年(改訂版)）、『明日の授業に活かす「意味順」英語指導—理論的背景と授業実践』（共著：ひつじ書房, 2021 年）がある。また、検定教科書の *LANDMARK Fit English Communication I, II, III*（新興出版社啓林館）の執筆者でもある。

千田 享（ちだ とおる）⑳W12 担当

農業高校、工業高校、外国語科設置校、そして制服の無い普通高校で教えてきました。2016 年から英語教育推進リーダーとして埼玉県で2 年間講師を、2017 年からは年次研修の講師を務めています。教員3 年目から語研にお世話になり、研究大会では11 回ほど発表の機会を得ました。また第60 回全国英語教育研究大会で発表できたのも語研で学んできたおかげだと思っています。検定教科書や検定外テキストの執筆では、オーセンティックな英語でリアルな情報を提供するように努めています。取得資格は、第2 種電気工事士、危険物取扱者乙種第4 類、珠算（日商1 級）、マスタースクーバダイバーなど。

津久井 貴之（つくい たかゆき）⑩P4 担当

国公立中高、中等教育学校、教育委員会と様々な職場で英語教育に関わってきました。現在は、言語活動や教師の役割の変化、Teacher Talk、翻訳・添削ツールや生成 AI を活用した授業づくりについて大学で研究しています。中高検定教科書（NEW CROWN, CROWN）や学習指導要領、全国学力・学習状況調査や NHK ラジオ講座（論理・表現 I）等に関わらせていただく中で、英語の教師として本当に大切なものは変わらず、英語による語りや問いかけであると改めて感じています。2011 年度パーマー賞受賞。

手島 良（てしま まこと）⑭A6 担当

武蔵高等学校中学校の教員です。関心はフォニックス、文字指導、発音指導、そして文法シラバス。いくつかの大学で「教科教育法」「教育実習」なども担当（非常勤）してきました。著書に『これからの英語の文字指導—書きやすく読みやすく』（研究社）、『英語の発音・ルールブック』（NHK 出版）、『通じる英語の発音ドリル』（研究社）、共著に『Sunshine』（中学校検定教科書、開隆堂）、『英語授業の「型」づくり』（大修館書店）などがあります。

永井 淳子（ながい じゅんこ）⑥W1, ⑯W9 担当

私学の中高一貫校で5年間英語科専任教諭として勤務したのち、東京都市大学付属小学校（旧東横学園小学校）で英語科講師となり、気がつけば33年が過ぎ、本年3月、「卒業(退職)」しました。現在は、田園調布雙葉小学校で週一度授業を担当、その他、青山学院大学・東京学芸大学の非常勤講師として教職課程（小学校英語）の講座を担当しています。子どもたちや学生と過ごす時間の中で、日々多くの刺激を受け、学びを得ることができ、感謝しています。子どもたちに小学校でどのような経験を積ませ、中学校に送り出していくべきか、一緒に考えて行きたいと思います。

根岸 雅史（ねぎし まさし）⑮A13 担当

東京外国語大学外国語学部英米語学科卒業。東京学芸大学大学院修士課程教育学研究科英語教育専攻修了。英国レディング大学大学院修士課程応用言語学専攻修了。1997年同大学より博士号取得。東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授を経て、現在同大学世界言語社会教育センター特任教授。専門は英語教育学。特に、言語テストおよび言語能力評価枠組み研究。基盤研究(A)「CEFR-Jに基づくCAN-DOタスク中心の教授と評価に関する総合的研究」（代表者）、学習指導要領実施状況調査問題作成委員会委員、結果分析委員会委員（外国語）、*New Crown English Series New Edition*（三省堂）（著者）

日高 由美子（ひだか ゆみこ）⑳W7 担当

教員生活が30年を超えました。中高一貫校の私立の女子校で25年、区立の中高一貫校で4年、都立の中高一貫校で5年になります。どの学校でも英語の授業で常に心がけていることは同じです。活動の縦軸として、教科書の題材内容に中心を置くこと。指導の根本にあるのは、授業で生徒に「リアリティーを感じさせる」「実際のコミュニケーションに近い場面を再現する」ということです。

福島 玲枝（ふくしま あきえ）⑯A8 担当

東京・大阪の国公立中学・高校での英語指導経験を積んで現職に至ります。また、中高教員時代から、高等学校検定教科書の編集委員として、生徒の対話を促す効果的なタスクデザインの開発に着目してきました。研究専門は生徒同士のやり取り活動の質的分析で、特に初級学習者のペアワークを対象としています。応用会話分析の観点から、英語でのペアワークにおける生徒間の対話の行動規範を詳細に分析し、その知見を授業実践や探究活動に活かすための提案を行なっています。

町田 協子（まちだ きょうこ）⑥W1 担当

小学校で1年生から6年生までの英語授業を担当しております。教員としてのスタートを切った際に、語研との出会いに恵まれ、小学校英語研究グループに参加し、一から小学校英語の基本を学ばせていただきました。日々、目の前の子どもたちと向き合いながら、試行錯誤を繰り返している中で、研究グループの先生方から多大な刺激を受け、学び続けることの大切さを実感しています。小学校の時期は、長期的な英語学習の基盤を築く大切な時期ですので、その中で何を大切にすべきかを皆様と共に考えていければと思います。

松原 木乃実 (まつばら このみ) ㉔W9, ㉔W14 担当

小学校で英語を教えるようになって間もなく、語研で研究されている先輩方の英語教育に関する考え方やその授業実践に触れて、「目からうろこ」でした。以来、子どもたちが英語の何をどのように学ぶのか、どのような指導で子どもたちは力をつけていくのか、仲間の先生方と研究したことを自分の授業で実践し確認したり、教員を目指す学生さんたちに伝えたりする毎日です。皆様方とも一緒に考え合うことができたら幸いです。

松下 信之 (まつした のぶゆき) ㉔P6 担当

府立高校2校で教諭として勤めました。「英語に対する苦手意識の払しょく」や、「大学入試への対応とコミュニケーション活動の両立」など、各校の課題は異なっていましたが、どちらの学校においても、「教科書の題材を生かすこと」や「個性・創造性を引き出すこと」を心がけて授業を行っていました。現在は、指導主事として、英語教育の充実をめざし、各校の支援に努めています。

望月 正道 (もちづき まさみち) ㉔A12 担当

高校で7年間勤務したあと、2年間イギリス留学。帰国後、大学に籍をおき現在に至ります。研究テーマは英語語彙指導から、英語教員養成、指導の4技能への効果など変化してきました。主な共著書は、高等学校検定教科書「Heartening English Communication I/II/III」(桐原書店)、「英語語彙の指導マニュアル」(大修館書店)、「英語で教える英語の授業: その進め方・考え方」(大修館書店)、「大学英語教育学会基本語 新 JACET8000」(桐原書店)など。趣味は、読書(ミステリー、江戸庶民物)、散歩(旧五街道の制覇を目指しましたが、孫が生まれて挫折。現在は徒歩圏内を増やしています)、料理。

矢田 理世 (やだ まさよ) ㉔P3 担当

大学卒業後、私立の高校で元気な男子集団相手に奮闘する日々から教員生活が始まりました。働きながら大学院へ通い MA TESOL を取得。検定教科書を軸に、学校でだからできることを最優先に据えて、生徒たちの個性を活かせる授業を目指しています。「論理表現」など検定教科書の執筆をしているほか、大学の教職課程の授業も5年間担当しました。2019年度パーマー賞受賞。

山崎 勝 (やまざき まさる) ㉔W10 担当

語研の研究者としてオーラル・メソッドを学んで30年が経ちました。語研でオーラル・ワークについて学び、英語で授業を運営する方法を知りました。語研でオーラル・ワークの実技指導を受けたことが、英語の教員としての財産になりました。埼玉県で公立高校で勤務して3校目になります。最近では、オーラル・メソッドを基礎に、段階的な指導による無理のないアクティブ・ラーニング (CLIL・協調学習) の実践をしており、「教科横断」的な教材開発に関心があります。

山本 智恵子 (やまもと ちえこ) ㉔A17 担当

中高一貫校という6年間を見通した英語教育が叶う現場で、よりよい授業づくり、テストづくりを目指し試行錯誤すること30年目となります。苦しくも楽しい定期テストづくりの仕事と奮闘を重ねる中、「授業はテストをもって完成する」という思いを強くしています。授業同様、生徒たちにテストによっても学びを深めてほしいと願いながら問題づくりに取り組む時間は、苦しくとも至福の時間でもあります。語研での学びを通じて、授業づくり、問題づくりのための多くの示唆を与えられてきたと思っています。

吉澤 孝幸 (よしざわ たかゆき) ㉔P7 担当

秋田県内の中学校に勤務して、現場一本で30年以上が経ちます。教室だからこそできる実践研究を少しずつ行ってきました。いまだに壁に当たることも多いですが、「壁に当たっていること自体良いことだ」と思うようにしています。授業が自分の一日の中心であることは、年齢を重ねても変わりません。2018年パーマー賞受賞。

吉田 章人（よしだ あきと）⑬W4 担当

1999年より日本女子大学附属高等学校に勤務し、現在に至る。2005年より8年間、日本女子大学にて「英語科教育法」を担当。「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」の検定教科書執筆にも携わっている。担当科目は、主に英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ、論理表現Ⅱ。教員2年目の2000年に語学教育研究所の第5研究グループ「授業研究」に授業者として研究発表を行って以来、研究員として活動を継続している。語研の提唱する the Oral Method を高校英語教育の現場でどのように応用し、活用してゆくかについて研究中。

若有 保彦（わかあり やすひこ）⑫A11 担当

宮城県出身。大学時代に語研の元理事長の若林俊輔先生に出会い、英語教師を志す。宮城県の公立高校教諭、東京都の私立中学、高専等の非常勤講師、英国大学院留学等を経て、2007年から秋田大学勤務。学部及び大学院で英語教員養成に関わる授業を担当している他、秋田市教育委員会の教科指導員、秋田県教育委員会の授業改善に関する事業等、教員研修にも携わっている。語研では評議員、若林俊輔奨励賞委員、若林俊輔先生著作集編集室長を務めている。

渡辺 麻美子（わたなべ まみこ）⑱W6, ⑳W14 担当

小学校で子どもたちに英語を教えるようになって気がついたら30年以上の年月が…未だに試行錯誤の日々です。子どもたちがことばを獲得していく姿を通して教えてくれることにいつも感動しています。語研の先生方から学ばせていただいたこと、第10グループで研究し学んだことを日々の授業にどうしたら活かせるか、子どもたちに還元できるかを考えながら実践しています。ワークショップでも参加者の皆様とご一緒に考えられることを楽しみにしています。